

その 12

万葉ファンタジア

謎解き「手児奈と珠名」



成田山新勝寺蔵『成田参詣記』(1858 年)から

新たに「万葉ファンタジア」なる回を設け、時に気分を変えて本稿の間に挟み込むことにする。今回はその第 1 弾、高橋虫麻呂の「手児奈」と「珠名」の歌をもとに、空想の翼を広げ、千数百年の時空を超えて、新たな物語を語ってみたい。

タイトルの「ファンタジア」はイタリア語で、空想とか幻想を意味し、音楽の世界では幻想曲をさす。もともとは「見せる」というギリシャ語がラテン語の「ファンタジア」になったという。英語、フランス語、ドイツ語では、日本語表記だとお馴染みの「ファンタジー」となる。このファンタジーとか、ファンタジアとかいうと、これまで何回となく「万葉ファンタジスタ」という呼称を使ってきた。ファンタジスタとは、これもイタリア語で、ファンタスティックなプレーで観客を魅了するサッカーのスーパースターを称える呼称だが、もともとは、ファンタスティックなセリフや即興劇で人々を魅了する役者や詩人のこと、つまり、「ファンタジアを語る人」のことである。そこで、2013 年に初めて万葉集を舞台化するにあたって、大伴家持を「万葉ファンタジスタ」と名づけて音楽朗読劇のタイトルとした。それ以来本稿では、家持のみならず、万葉を代表する歌人たちを、万葉ファンタジスタと呼んできた。

ファンタジスタという思い出される人がいる。「ファンタ爺さん」を自称した、私の畏敬する先輩、元 NHK の名アナウンサー故・塚越恒爾さんである。塚越さんは、NHK 退職後、孫たちに聞かせるための物語を創作、それを孫だけではなく、多くの子どもたちにも語って聞かせる活動に取り組んできた。それが、2004 年に NHK「みんなのうた」で「ファンタ爺さんのうた」として放送され評判となった。NHK 出版からは、ファンタ爺さんをタイトルとした本も出版された。そこで、今は天国でファンタジーを語っているだろう塚越先輩に許可をもらい、ファンタ爺さんの名跡を引き継ぎ、「万葉ファンタ爺さん」という呼称を使わせてもらうことにした。

そこでまず真っ先に万葉ファンタ爺さんとして紹介したのが高橋虫麻呂だった。虫麻呂の生没年月等は不詳、歌を詠んだ年代も不明なので、爺さんと呼ぶのは全くもって失礼にあたるかもしれないが、この呼称が最も相応しいのが、その作風から言って、異色の伝説歌人虫麻呂だった。かく言う私も、ファンタスティックな「ファンタ」については虫麻呂や塚越さんには及びもつかないが、「爺さん」と呼ぶ歳には不足ないことから、「ファンタ爺」チームのタスキをつなぐ新人の 1 人として、今後この万葉ファンタジアの語り部を引き継いでいきたい。

さて、ファンタジアを語るにあたっては、ファンタジアのももとのギリシャ語の意味「見せる」を基本にしたい。

そもそも新人ファンタ爺さんこと、私はテレビ畑の出身で、その後は万葉集宣伝係として、無謀にも、その舞台化に挑戦、脚本を担当してきたことから、「書いて読んでもらう」ことより、「見て楽しんでもらう」ことに重点を置いて、これまで取り組んできた。前述した 2013 年には、大伴家持生誕 1300 年記念のプレイベントの一環として、高岡市で音楽朗読劇「万葉ファンタジスタ大伴家持」（主演：石黒賢）、翌 14 年には、「新版・万葉ファンタジスタ大伴家持」（主演：石黒賢）を上演。2019 年には、ファイナルイベントとして、鳥取市で、「いや重けよごと～愛のものふ大伴家持」（主演：和泉元彌）を公演、いずれも企画、脚本を担当した。その直後、万葉集由来の新元号令和が発表され降ってわいたような万葉集ブームに乗り、2020 年 8 月東京は浅草公会堂で音楽朗読劇「YAKAMOCHI～いや重けよごと」を公演することにした。ところが、思いがけない事情が突発して、脚本執筆段階でやむなく中止を決断。その直後から始まったコロナ禍によりすべての舞台公演が中止になった波乱の顛末については改めて書く機会があるだろう。

そこで、「万葉ファンタジア」は、これら上演済みの舞台や上演予定の脚本から、本稿のテーマに沿った部分をピックアップして、お芝居のセリフ仕立てで紹介することとしたい。言うまでもなく、お芝居は役者さんのまきにお芝居で面白くなる。脚本を読むだけでは退屈なことは覚悟の上だが、その分役者さんが演じる舞台を空想しながら読んでいただくことで補っていただきたい。そのためのファンタジア＝空想ということでもあるのだから。

今回は、「手児奈と珠名」である。これは新たに書き下ろしたものだが、最初にイメージした物語は、真間の海に入水した乙女手児奈が、その数日後上総国の海岸に流れ着き息を吹き返すと、なぜか妖女珠名に変身していた。その「変身する間に、何が起こったのか?」、竜宮伝説等を織り込んで話を展開すると面白くなりそうな気がするが、所詮手児奈と珠名の話を、そのままつなげただけなので、芸がない、やめた。

では、新人ファンタ爺さん、どうするか? まずは手児奈と珠名の話を大事にしながら、2 人を組み合わせ絡み合わせることで、虫麻呂の歌を読んだだけでは分からなかった 2 つの疑問、「手児奈はなぜ入水したのか?」、そして、「珠名はなぜ悪女になったのか?」など、大胆に謎解きをしながら、1 つの物語にまとめていく。題して、謎解き「手児奈と珠名」。はてさて、どうなることやら……なにはともあれ、ひとまず万葉ファンタジアの幕を開け、空想の翼を広げて飛び立ってみよう。

万葉ファンタジア 謎解き「手児奈と珠名」



(挿絵)市川民話の会「真間の手児奈」から

昔々その昔、時は秋、下総国は真間の「真間の井」。青い襟の粗末な麻の衣を着、履もはかず髪もとかずとも美しい乙女、手児奈が水を汲んでいる。と、秋だというのに飛んで火に入る夏の虫のように男たちが寄ってくる。

「身なりは貧しけれど、花のごとく、なんと美しいことよ！娘さん、あなたのためにオミナエシの花を摘んでまいりました」、「まあ、美しいオミナエシの花」、「オミナエシは、美女をもしのぐ美しい花。でも、このオミナエシも、あなたの美しさをしのぐことはできません。どうぞお受け取りください」、「どうもありがとう」。

そこに、もう1人の男がやってくる。

「ちょっと待った！あなたのためにナデシコの花を摘んでまいりました」、「まあ、美しいナデシコの花」、「ナデシコは、思わず撫でたくなるような可愛らしい花。このナデシコもあなたの可愛さにはかないません。どうぞお受け取りください」、「ちょっと、待った！私のオミナエシをどうぞ」、「何を申す！私のナデシコをいかが」。

手児奈、おずおずと2人の男から花を受け取る。「美しい花を、どうもありがとう」。

一方、上総国の末。すぎる蜂のように胸が大きく腰がくびれた珠名が立っている。と、出かける途中の男たちまで寄ってきて声をかける。

「なんとキラキラ輝くように、花のごとく美しいお姿。ここに来る野辺でオミナエシの花を摘んでまいりました」、「あら、オミナエシなの……そう、ありがと」。

珠名は、花を受け取るとすぐ、その目の前でポイッと捨てる。もう1人の男がやってきて珠名に声をかける。

「珠のように美しい珠名さま！あなたのためにナデシコの花を摘んでまいりました」、「ナデシコの花。あら、そう、ありがと」。

珠名は同じく、花を受け取るとすぐ、その男の目の前で捨てる。

「男たちって、女に花を上げれば、誰でも喜ぶとでも思っているのかしら……次に来る時は、花より美しいもの、万世に残るものを持ってらっしゃい」、「花より美しいもの？万世に残るもの？」

時は冬、真間の井。1日に何回も水汲みにやってくる手児奈が桶で水を汲んでいると、男たちがやってくる。「手児奈さま、手児奈さま、はだしの足が、ほら、ひび割れているではありませんか。この履をお履きください」、「ありがとう。でも、このようなものをいただくわけにはまいりません」、「私と一緒になれば、もう水汲みなどはさせません。その桶をお貸しください」、「いけません、井戸の水汲みは私の仕事。なにとぞ放っておいてください」。

もう1人の男が衣を手を持ってやってくる。

「手児奈さま、手児奈さま、麻の衣一枚では凍え死んでしまいます。この錦織の衣と着替えてくだされ」、「ありがとうございます。でも、このようなものをいただくわけにはまいりません」。

一方、時刻は真夜中、珠名の家の前に男が立っている。そこにまたもう1人の男がやってくる。

「なんじゃ、お前さん。なんで、こんなところに立っておる？ 珠名さまの家の前ではないか」、「訪ね訪ねて、やっと珠名さまの家にたどり着いたところじゃ……お主もか？」、「わしか？ わしは珠名さまの隣に住んでおるんじや」、「なに、隣じゃと？ ずるいではないか」、「なに、何がずるいか！」。

2人が言い争う声を聞きつけて、家の中から珠名が出てくる。

「何ごとですか？ このような夜中に、私の家の前で諍いをしているのは……あら、また、あの時のお二人なの？ 花だったら結構よ」、「珠名さま、今日は花よりもっと美しいもの、もっと万世に残るものを持って参りました」、「花より美しく万世に残るもの？ 何も持っていないではないですか」、「物ではありません、それは言の葉、歌です。あなたのために歌を作ってまいりました」、「歌？ ……そんなものは何の足しにもなりません」。

隣の男が、珠名の前に鍵を突き出しながら、男に毒づく。

「歌などとは、バカな……珠名さま、これをお受け取りください」、「あなたはお隣の……これは何？」、「いつの世にもお役に立ちます。私の家の鍵です。」、「あなたの家の鍵？ それでは、あの可愛い奥さんはどうされたの？」、「妻は家から追い出しました」、「奥さんを追い出した……それなら、ありがと。もらっておくわ」。

それから数日後。再び、真間の井。

「手児奈さま！ 今日には錦よりもっとよきものを持ってまいりました」、「もっとよきもの？」、「はい、物ではなく歌です。手児奈さまの歌を詠みました。お聞きください」。

「足の音せず 行かむ駒もが 葛飾の 真間の継橋 やまず通はむ」 下総国歌(巻 14・3387)

(足音をしないでゆく馬がいたらなあ。葛飾の真間の継橋を、いつも通ってあのひとに会いたい)

「なんて素敵な歌……ありがとう」、「なんじゃ！ 足音がしない馬などいるわけないだろう。なんとも拙い歌じや」、「拙い歌とはなんじゃ！」、「手児奈さま、私はもっと素晴らしい歌を持ってまいりました。お聞きください」。

「葛飾の 真間の手児名を まことかも 我に寄すとふ、真間の手児名を」 下総国歌(巻 14・3384)

(あの葛飾の真間の手児名、本当かなあ。私と親密だって誰かが噂しているって、真間の手児名と)

「あら、そのようなことを？」、「なに？ 手児奈さまが、お前に思いを寄せているって？ そのようなことがあるわけがなからう！ 嘘を詠うにもほどがある」、「何を言うか、歌は時に嘘を詠うもの。言霊の力で、嘘が真になるものなじゃ。お前こそ、そもそも馬など持っておらんのに。嘘を詠っておるのはお前じや」、「何を、このクソ野郎」、「何を、このクソ野郎！」。

「おやめください！ 私のために喧嘩をなさらしないで！ 私のために争わないでください」。

同じく数日後、隣の男の家に移り住んだ珠名は、男に愛想をつかして家を飛び出る。

「待ってくれ～！ 珠名、待ってくれ～！」、「なによ！ もうあなたには用はないの。2度とあなたの家なんぞ戻らないわよ」、「戻ってくれなんて頼んでない。妻が帰ってきて、わしが追い出されたのじゃ」、「知るものです

か！私は、行かねばならない、行かねばならないのです」、「行かねばならない？……どこに行かれるのか？」。

真間の井では、手兎奈をめぐって男たちの取っ組み合いの喧嘩が始まる。周りの男たちが取り囲んで囁し立てる。ところが、急に静かになったので、手兎奈は水を汲む手を止めて振りかえる。と、男が1人、倒されて息も絶え絶えになっていた。

それを見た手兎奈。「ああ、私のせいで……私は、罪作りの女。私が生きている限り、これからも男の方々を不幸にしてしまう。私は生きてはいけない女なのだわ」。

手兎奈は突然走りだし、走りながら呟く。その後を追いかける男たちの耳にも切れ切れに届く。

「どうせ長くもない一生なら……」、「長くもない一生……？」。

「……ああ、手兎奈さまが海の方に」、「ああ、手兎奈さまが海に入っていく」。

(ここまでは、虫麻呂ファンタ爺さんの歌の翻案……ここからは、新人ファンタ爺さんが物語のタスキを引き継ぎ、歳も顧みず空想の海へ飛び込んでいく)

その時、1人の女が、息せき切って駆けつけ、叫ぶ。「待ちなさい！戻ってきなさい！」。

男たちもともに叫ぶ。「手兎奈さま、戻ってきてください」、「戻ってきなさい！」、「戻ってきてください！」。

「大変だ、とうとう手兎奈さまの姿が見えなくなった」、「手兎奈さまが入水された」、「手兎奈さまがなんで入水を？あれほど多くの男たちに慕われたというのに……なぜじゃ！」。

「待ちなさい！愚かな男たちのために死ぬなんて……悪いのはあなたじゃない……私……」。

その女は、珠名だった。叫びながら珠名も、手兎奈の後を追って海に入っていく。やがて珠名も海中に沈んでその姿が見えなくなった。愚かな男たちは、2人の娘子が海に消えていくのを見ているばかりだった。

時は悠久の世界。かくして2人の乙女は竜宮の住人となり、ともに神に仕える身になった。新しい名は、手兎奈神と珠名姫。ところが竜宮に来てから手兎奈が以前にもまして悲しそうにしているのを見て、珠名は「やはりあの話をしなければ」と心に決め、手兎奈を竜宮の春の庭に誘い出し、まず尋ねた。「どうしてそんなに悲しそうな顔をしているの？」。

しばらく桜の花を見ていた手兎奈は、そう言えば真間の井の近くにも美しい桜の木があったことを思い出して呟いた。「桜の木の下で会ったあの人に、ここ竜宮に来て会えないので……」、「……あの人？」。

手兎奈は、ぼつりぼつりと話し始めた。

「昔々、私には相思相愛の恋人がいたのです。恋人は腕の立つ漁師で、いつも美味しい魚をたくさん取ってきてくれました。しかし、ある日あの方は漁に出たまま嵐に巻き込まれ帰ってこなかったのです。それから、あの方が寒い海からいつ帰ってきてもいいように、いつも湯屋にたっぴり温かい湯を用意して待っていました。そのため毎日何回も真間の井に通っては水を汲み続けました。でも、そのたびに男たちがやってきては誘うのです。それから逃げたくて、粗末な麻の衣を着て履もはず髪も梳らずにいたのですが、相変わらず何人もの男たちが

言い寄ってきては、あの日取っ組み合いの喧嘩が始ったのです。私は知らん顔して水汲みを続けていたのですが、急に静かになり喧嘩も収まったのかなと思ったら、一瞬『ブーン』という音が聞こえた気がして後ろを振り向くと、男が倒れ息を引き取るところでした。『ああ、私のせいで……』。私はたまりかねて駆け出しました。こんなことは嫌だ。あの人に、そうあの人に会いたい、あの人の顔を一目でもいいから見たい。そして、矢も楯もたまず、あの人がいる海に飛び込んだのです……でも竜宮の海でも、あの人に会うことはできませんでした」。

初めて手児奈が海に飛び込んだ理由を聞いて、珠名も昔の恋人のことを思い出していた。「私にも同じく相思相愛の恋人がいました。いつもその人にすがりついていたことから、人は私のことを『すがる娘子』と呼んでからかうのです。ところがある日、その人は私の前から忽然と姿を消してしまったのです。数年間待ち続けたのですが、その人は帰ってくることはありませんでした。恨みました。憎みました。でも、愛しい。しかし、それから男たちをたぶらかして生きていくしか道はありませんでした。ある時風の便りに、その人が隣国の下総に居ることを耳にし、やっとのことで探し出したのです。ところがその人は、他の男と取っ組み合いの喧嘩をしていたのです。粗末な麻の衣を着て履もはかず髪も梳らず、でも隠しようもなく美しい女をめぐって……それを見た途端、私の身体は、一瞬にして小さな『すがる蜂』に変身していたのです。そして、思いっきり羽ばたいて女の上を飛び越し（ブーン）、その人の胸を鋭い針で刺してしまったのです。刺した瞬間変身が解け我に返った時、その人は私の足元に倒れていました。蜂の一刺しで息絶えていたのです。

その時海辺から男たちの声が聞こえてきました。「ああ、手児奈さまが海に入っていく……」。

大急ぎで海に駆け付け、「男が死んだのは、あなたのせいではない。私が……」と告げるつもりで、ここ竜宮まであなたを追ってきたのですが、これまで話すことができませんでした。そしてやっと今、話すことができたのです。

竜宮で悠久の時空が流れているこの時、地上では 1300 年の年月が過ぎ、「令和」という大変な時代になっていたそう。そう、そう、そう言えば、その昔、手児奈は乙姫、珠名は蜂姫ならぬ亀姫という竜宮の女神になった時、日本各地で浦島太郎をはじめとする様々な竜宮伝説が生まれ広く流布するようになった、とき。

珠名ナウ。もう 1 度「珠名塚碑」をみてみよう。

前回、「手玉に取られた男が腹いせに割った跡を（？）補修したのだろう、男が珠名にすがりつき抱きつき口吸いを迫っているようにも見える」と書いた。

しかし、このようなファンタジアを語った後に見ると、珠名と男は、逆に「鋭い針で一刺しして倒れて割ってしまった元恋人を、珠名が抱きかかえ介抱し、最期の口吸ひをしている」ようにも見えるから、まさにファンタジア = 幻想とは、いと面白きものかな。

